



イエメン北部の難民キャンプで活動中の様子。

イエメン南部のアデン湾沿岸には、ソマリアやエチオピアからの難民が密航船で到着します。難民たちは密航業者に高いお金を払い、この危険な船の旅に命をかけてやってきます。小さな船の上では密航業者に暴力を振るわれ、十分な水や食べ物もなく、船底で窒息死する人もいます。船から逃げ出すこともできず、常に「死」を感じながら、数日間の航海を耐えるのです。

イエメン到着後、難民の多くは仕事を求めて、さらに北のサウジアラビアを目指します。しかし、国境付近では、昨年夏頃よりイエメン軍と反政府組織の戦闘が激化し、イエメンの人びとですら避難生活を強いられました。そこでは、戦闘に巻き込まれて大勢の人びとが亡くなり、子どもたちの多くは栄養失調にかかっていました。

「死」を感じるほどの暴力から逃げてきた人たちは、眠れなくなったり、物音に怯えたりすることがあります。彼らにはまず、安全な場所と十分な休息が必要です。心理ケアは彼らがしっかりと休んだあとに行われます。暴力被害後に起こりうる心理症状について説明すると、みな口々に「なぜ私たちの苦しみがわかるのか」と言います。そして、戦闘下で生き延びることが、いかに大変だったか語り始めるのです。私たちが行う心理ケアの基本は、「丁寧に耳を傾けること」です。ときに、耳をふさぎたくなるような話も語られます。それでも、彼らの苦しみを理解し、ケアしようとする者がいることが、彼らの励みになっているようです。



ハイチ 医療の足りない国で 起きた悲劇

地震の直後、屋外にベッドを並べた仮設の「手術室」で治療が続いた。

求められるのは“続けられる薬” ——結核治療支援キャンペーンを実施しました——



結核治療薬は強い副作用が問題になっている。

結核は、世界人口の3分の1が感染し、年間900万人が発症、200万人が亡くなっている、世界で最も深刻な感染症の一つです。

国境なき医師団(MSF)日本は、3月24日の「世界結核デー」に合わせて、今年3月を結核対策の強化を訴える月と位置づけ、結核の診断法や治療薬の研究開発が急務であることを伝えるウェブ・キャンペーンを展開しました。

キャンペーンの主な内容

- MSF日本からのメッセージ：メディカル・アドバイザー、アミン・ダマン医師がビデオ・メッセージで、診断法や薬の開発など、結核対策の必要性を訴える。
- アルメニアの事例紹介：現地でMSFの治療を受ける結核患者の声や治療の現状を伝える記事と写真スライドショーをウェブサイトに掲載。
- 「結核デー」のアピール：3月24日の「世界結核デー」に合わせ、結核対策強化を世界に呼びかけるMSFの声明を発表。



結核とHIV/エイズの二重感染に苦しむ患者も多い。



アルメニアでの結核治療プログラム。治療は長期間を要し、ときには2年にも及ぶ。

詳細は、ウェブサイトで

www.msf.or.jp/news/2010/03/4386.php

MSFインフォメーション

● 海外派遣スタッフ募集説明会に参加してみませんか？

MSF日本では、海外派遣に興味をお持ちの方のための説明会(参加無料)を毎月開催しています。開催日時・場所など詳細については、下記のウェブサイトをご覧ください。E-mailまたはお電話でお問い合わせください。

「海外派遣スタッフ募集説明会」 Web: www.msf.or.jp/work/ から「海外派遣スタッフ募集説明会」へ
参加申し込み・問い合わせ先 Tel: 03-5286-6161 E-mail: recruit@tokyo.msf.org

● 音楽で寄付する新しいカタチ

ACジャパンのMSF支援キャンペーンCMで使われた曲「BEYOND THE BORDER」をダウンロード購入すると、経費を除く収益がそのままMSFへの寄付になります。詳しくはウェブサイト www.msf.or.jp/special/donate_music/ まで。



ダウンロードは
こちらからも
可能です

● 遺産・お香典からの寄付に関するパンフレット

国境なき医師団は、遺産や相続された財産を次の命へとつなぐ架け橋になります。寄付していただいた遺産は非課税扱いになります。パンフレットは、下記の電話番号がウェブサイトからお申し込みください。フリーダイヤル: 0120-999-199(9:00～19:00 無休)
Web: www.msf.or.jp/donate/ から「寄付をする」>遺産・お香典からの寄付へ



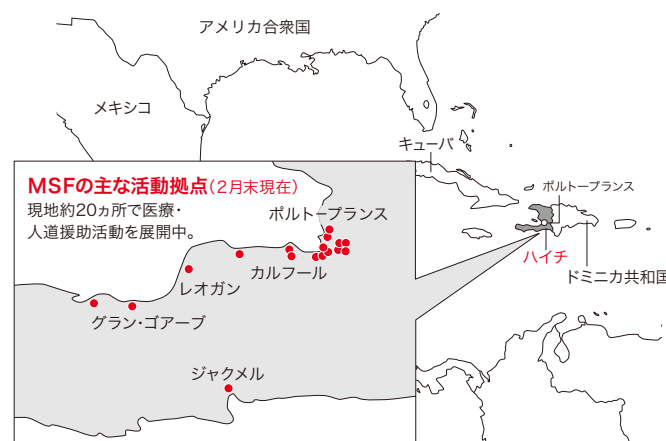
特定非営利活動法人国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ 0120-999-199 (9:00～19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階 Tel: 03-5286-6123 (代表)

国境なき医師団(MSF)は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人びとの緊急医療援助を主目的とし、医師、看護師をはじめとする4600人以上の海外派遣スタッフと、2万4000人の現地スタッフが、世界65ヵ国で援助活動を行っています。(2008年度)

今年1月、大地震に見舞われたハイチで、国境なき医師団(MSF)はただちに緊急援助活動を開始しました。皮肉なことに、地震の数分後から負傷者の治療を始められたのは、もともとこの国に医療が足りず、MSFが活動中だったからです。ハイチを救いたいという思いが世界中から向けられたいまこそ、あらためて、人びとの命を危機にさらす「医療がない」という事態について、お伝えします。



活動 ニュースフラッシュ

スリランカ 内戦終結後も続く負傷者の治療

昨年5月の内戦終結後、避難民の帰還が進められていますが、紛争の影響を受けた人びとの間には、まだ多くの医療ニーズが残っています。戦闘に巻き込まれて負傷し、傷口の感染が骨まで達している患者も多く、今後も再建・整形外科手術が必要となります。MSFは、多くの避難民の帰還・定住先となっているマンナール県やジャフナ県で外科治療を提供するとともに、避難民キャンプで心理ケアを続けています。 <2月25日現在>

バングラデシュ ロヒンギャ難民への迫害を非難

ミャンマーの少数民族ロヒンギャは、長年、国内で迫害を受け、多くがバングラデシュに避難していますが、そのうち約22万人は国連の難民認定が受けられず、援助もない劣悪な環境での生活を強いられています。MSFは現地で人道援助を提供してきましたが、ロヒンギャ難民への現地当局による弾圧や、地元住民による暴力が増大している状況を受け、2月18日に報告書を発表して、暴力の即時停止と国際社会の取り組みを求めました。

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人道危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただくための情報をお届けします。



ハイチ人外科医フィリップ・ブルーアーは、2006年からMSFと共に活動している。

カルテの 向こう ―命をめぐる物語―

ハイチ人医師として

大地震の発生時、ハイチで活動していたMSFスタッフは830人、うち約800人がハイチ人の現地スタッフでした。地震後、多くのスタッフが崩れた建物の下敷きになるなどして行方不明になり、後に7人の死亡が確認されました。

無事だったスタッフたちは地震の直後から援助活動を開始。家族や、帰る自宅を失った現地スタッフも、その多くがすぐに職場に戻りました。あるスタッフは「他の国から来て命がけで人びとを治療してくれる人があるなら、ハイチ人の私も同じことをしなくては」と、路上で家族と寝泊まりしながら活動現場に通いました。

ハイチ人外科医のフィリップ・ブルーアーも、地震発生の当日から援助活動に従事した一人です。崩壊したトリニテ病院には、それでも多くの負傷者が助けを求めて押し寄せ、スタッフは一人でも多くの命を救おうと努力しました。

「患者たちは私の体をたたくなど、常に注意を引こうとします。『先生、ここです。忘れないでください』と。やれることをすべてやっても、次々に呼び止められます。緊急度の高い患者から診察せざるをえませんが、他の患者にも常に『心配しないで、すぐ行くよ』と声をかけるよう努めました」

幸いにもブルーアー医師の家族は無事で、自宅にも大きな被害はなかったものの、それでも精神面の影響は大きいといいます。

「いまはとにかく一日中治療し、患者に集中しています。でも、帰宅するときには荒廃した国の様子が目に入り、心を乱されます。多くのすばらしい人命が失われました。1週間後、1ヵ月後、1年後、自分の人生はどうなるか、考えずにはられません」

あまりに多くのものを失いながら、ここでは人びとの支え合いが続いています。

震災前のMSFの活動から

■ 移動診療による妊婦検診。スラム地区を回り、リスクの高い妊婦を探す巡回活動や、心理ケア、産後ケア、HIV/エイズの検査と治療も行ってきた。■ 常に満員だったMSFの産科病院。ここで緊急産科ケアを開始してから3年間で、4万人以上の赤ちゃんが産まれた。■ 銃で撃たれた男性の応急処置。マルティッサン救急診療所はこのスラム地区で唯一の医療施設として設立され、毎月約8000人の緊急患者を受け入れていた。



中南米の 最貧国で 続いていた危機

ハイチは1804年に中南米で最初に植民地支配からの独立を宣言した国ですが、その後も軍事独裁、米国による占領、クーデターなど、政情の混乱と武力対立が続き、国民は震災前から貧困と暴力にあえいでいました。

保健や教育、経済水準から国民の生活の質を測る国連「人間開発指標」では、2009年のハイチの順位は世界182カ国中149位。一人あたりGDPは1155ドル、平均余命61・0歳で、中南米諸国の平均値1万77ドル・73・4歳を大きく下回ります。〔1〕この国で、MSFは1991年から活動しています。公立病院では医師が

足りず、治療費も高額なため、特に貧困層の人びとにとって「医療がない」に等しい状況が続いてきたからです。

出産で命を落とす女性たち

ハイチの医療不足による影響が顕著に現われているのが、44人に1人の女性が妊娠・出産で命を落とすという、妊産婦死亡率の高さ。日本では1万1600人に1人、中南米諸国の平均でも280人に1人です。その背景には、ハイチでは妊婦の4分の3が医師や助産師による専門的な介助なしに出産するという事実があります。〔2〕

2006年にMSFが産科ケアを無料で提供する病院を開くと、医療を受けられずにいた多くの妊婦が殺到。他の病院で治療を断られた末にMSFの待合室や駐車場に到着し、その場で出産に至るケースも珍しくありませんでした。無事にたどりつけば幸運です

が、病院を回っているうちに命を落とす母親や赤ちゃんもいたのです。

銃撃や性暴力に脅かされる命

政情不安や治安の悪さによる暴力の蔓延も、人びとの命を脅かしてきました。MSFは、人口300万人の大都市ポルトープランスで唯一の緊急外科施設であるトリニテ病院で、2008年には2万4000人以上を治療。うち、銃撃による負傷者は月平均45人に上りました。また、性暴力被害の治療プログラムでは年間468人に治療と心理ケアを提供しましたが、半数以上が18歳未満の少女でした。

◆ ◆ ◆
これからハイチを待つ、震災からの復興という長い道のり。その向かうべき先は、「震災前の社会」ではなく、「すべての人が必要な医療を受けられる社会」でなければならないのです。

ハイチ 医療の足りない国で起きた悲劇

【ハイチ大地震の被害規模】〔a〕
被災者：約300万人
死者：約22万人
負傷者：約30万人
家を失った人：約190万人
【MSFの震災後の活動実績】〔a〕
診療患者数：2万8251人
手術件数：2963件
心理ケア：2825件
スタッフ数：現地スタッフ 2784人
外国人スタッフ 393人
配布した物資：1万1550セット
配布したテント：4614張

〔a〕国連「Haiti Revised Humanitarian Appeal」(2010年2月18日付)
〔b〕2010年2月18日現在

地震から6日後の首都ポルトープランスの様子。人口300万人の過密地域で多くの建物が崩壊し、交通アクセスが妨げられたことも、救援活動を困難にした。

現地時間1月12日午後4時53分、マグニチュード7・0の激しい地震がハイチを襲いました。国境なき医師団（MSF）が活動していた4つの医療施設も被害を受け、多くの患者、スタッフが建物の下敷きになりました。トリニテ病院の向かいのMSFの事務所にいたスタッフ、ジョーダン・ワイリーは、激しい横揺れに襲われて外に飛び出し、3階建ての病院が崩壊するのを目の当たりにしました。

「揺れがおさまった直後、周囲は静まりかえっていました。それから3、4秒して、町全体に悲鳴があふれたのです。その叫びと泣き声の凄絶なコーラスを、私は一生忘れられないでしょう」

ワイリーと他のスタッフはただちに病院に向かい、できる限り多くの人を救い出し、使える医薬品と器具を集め、場所を確保しました。他のMSFの施設でも、すぐに多くの負傷者が運び込まれ、夜を徹して治療を実施。翌日までにMSFは千人を超える患者を治療し、その後も仮設の手術室で昼夜を通じて緊急外科手術を行いました。現地の壊滅的被害で医療は不足し、さらに輸送機の着陸許可が下りず、物資の到着が遅れる事態も発生しました。

「医療物資の不足で5人の患者が亡くなり、さらに、治療を懇願する人がまだ大勢待っています。活動の中で一番つらい局面です」
（1月20日／緊急対応コーディネーター、ロリス・デ・フリックビ）

MSFは外科治療の拡大に努める一方で、クラッシュ・シンドローム※の透析治療や、心理ケアの提供も開始しました。2週間後には2つの手術室と200床の入院施設を備えたテント病院が設置され、外科治療は第2段階に

入りましたが、術後ケアやリハビリはこれからの長い闘いになります。

「手術後も、重傷の場合は包帯交換や洗浄などの集中看護が欠かせません。皮膚移植や義足も必要になります。今後、数ヵ月後も、それ以降も続く問題です」
（1月28日／疫学専門家ブリック・レイリ）

被災者の避難生活が続く中、MSFの活動は、1ヵ月後には感染症予防、水や住居・生活物資の供給、産科ケア、そして一般診療にも広がりました。



1月15日 地震直後、多くの負傷者が治療を待つ。



1月19日 負傷者の腎臓透析治療を開始。



1月20日 負傷者や家族に心理ケアの提供を開始。



1月25日 余震被害の恐れのないテント病院が完成。



負傷者の治療とリハビリは今後も長期にわたって続く。

※クラッシュ・シンドローム：長時間がれきの下敷きになって筋肉に強い圧力がかかったあと、血液中に大量の毒素が流れ込み腎不全を起こす症状。
データ出典：〔1〕UNDP "Human Development Report 2009" 〔2〕UNICEF "The State of the World's Children 2009"